

医師は病気と向き合い、看護師は人と向き合う」という言葉は、私が大学に入った当初に言われた言葉だった。看護師という立場がよくわからず、自分の看護が漠然としていた当時は分からなかったが、実習を重ね、様々な講師の話を書くにつれて私はその意味を強く理解した。

看護師に薬を処方することはできない。あくまで医師のみが、患者さんに薬を出すことができる。その分かりきった事実が、今の訪問看護、在宅看護では大きな障害となっている。末期の病状に苦しむ患者さんに、鎮痛剤を処方することすら許されない現状を日本の訪問看護を設立した方は、その悔しい思いを語ってくださった。目の前に苦しんでいる人がいるのに、その苦しみを取り除くことができないその方は、必死に患者さんの手を擦り、足を擦り、背を擦った。手を握りしめ、絶対に一人にしなかったそうだ。その患者さんは最期の瞬間に「薬なんかなくていい。この手があればいいんだ。」と言われたそうだ。

それは私にとって衝撃だった。同じようなことをしたことがあったからだ。二年生の実習中、私は担当患者さんの外科的処置に付き添ったことがある。医師達は患部にかかりきりで、看護師さんはその補助で患者さんを省みる暇がなかった。授業で事前に分かっていたとしても、それは悲しい光景だった。誰も患者さんという人間に向き合っていない瞬間だった。痛みを堪える為にベッド柵を握りしめていた患者さんの手を、私は摩って、ずっと握っていた。できることがなかったからというものもあったが、少しでも不安がなくなればいいと願ってやった事だった。次の日に病室に伺うとにこにこ笑いながら「あの時に手を握ってくれたの、あなた？」とおっしゃられた。私がいちと言おうとその方は「ありがとう、痛かった時にふっと安心してさ。ああいうふうに手を握られるのってすごいね。」と言って下さった。自分の些細な行動が患者さんにとって大きな働きとなっていたことが嬉しかった。

薬は病気に対抗する手段だ。ならば人間に向き合う私達看護師は、手こそが最大の医療だと思う。実際にそれで病気がよくなるわけでも、苦痛がなくなるというわけでもない。しかし、傍にいて、その肌に触れて寄り、病気という単位ではなく人間全体として最後まで患者さんに向き合うことこそが看護師であると私は思っている。専門知識、技術を習得した医療従事者というだけでなく、一番近くで患者さんを支え、向き合う看護師になりたい。その第一歩というのが、相手を思いやることで自然と差し出される手であり、その手を当てることで患者さんが感じることでできる温もりや握力などの思いを伝える証なのではないかと思う。